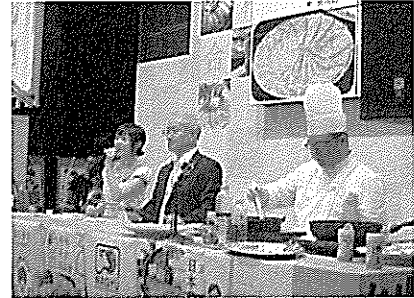


日本畜産物輸出促進協が香港フードエキスポで日本畜産物PR



会として催された。

今回のジャパンパピリオンは251団体、出展面積1746㎡、194小間と最大規模になっており、そのうち12小間を同協議会が使用。特設ステージとそれぞれの輸出部会ごとにブースを設け、PR活動を行った。また、山本有二農水大臣をはじめ、日本から多数の国会議員も訪れるなど活況となった。オーブニングセレモニーで山本大臣は今回のテーマである「味わおう日本の「味力」」に触れ、日本産食材の素晴らしさと安全性についてPRした。

講演では、中央畜産会の伊地知俊一専務理事が日本畜産物について、5品目のロゴマークを紹介。肉用牛飼養状況と牛肉生産量、乳用牛飼養状況と産乳量、養豚の状況と産肉量、ブロイラー飼養状況と銘柄鶏、さらに採卵鶏飼養状況と生産量について、それぞれ説明した。

また、ミートコンパニオンの植村光一郎常務取締役は「日本畜産物&おもてなし日本料理」と題し、同じく5品目の特長を解説。和牛肉については血統登録、脂肪交雑、和牛香、格付を説明し、和牛のすき焼きとしゃぶしゃぶを紹介。豚肉については品種と飼料、軟らかさとこだわりの銘柄、トレーサビリティ、格付を説明し、トンカツと豚しゃぶを紹介。さらに鶏肉については地鶏・銘柄鶏・ブロイラーの種類と特長、健康的機能性、和食に欠かせない食材、食鳥処理の安全性を説明し、鶏すき、焼き鳥と竜田揚げを紹介したほか、鶏卵や牛乳製品についても詳細な説明を行った。そのあとは輸出部会ごとのPRセミナーとなり、人気の和牛をはじめ、鶏肉部会では「東京シヤモ」が紹介されるなど、それぞれ特色のあるPR活動が行われ、どの部会も終止にぎわっていた。

講演を終えた植村常務は「今回は山本農水大臣、林芳正・元農水大臣ら国会議員の随行があり、農林水産業輸出強化戦略の輸出額1兆円目標について現実味を感じられ、武者震いを覚えるのと同時に総力をあげての取り組みに一体感と将来性を感じた」と述べた。